

東

京の副都心、池袋と新宿。西武池袋線と西武新宿線

は、両駅を基点に並行して走っている。約25分も走ると、それぞれ東久留米駅と花小金井駅に着く。現在は通勤圏の住宅地として栄えるふたつの駅の間には、かつて広大な雑木林・畑地が広がっていた。

1968年冬、この地に滝山団地が完成。賃貸と分譲合わせて約3200戸、1万人を超える住民が憧れの団地に移り住んだ。立地や敷地の広さはマンモス団地を建設するために最適だったが、周辺にはほかに何もなく、住環境が整っていないと言えなかった。

団地から駅までは遠い。住民の足としてバスが必要だった。だが花小金井はともかく、東久留米は本数が少ない。最終バスの時刻は8時20分。勤め人にとっては早すぎる時間だ。最終バスを逃した住民は、いつ来るとも知れないタクシーを待ち続けた。

団地完成時には、周囲に病院もなかった。高い倍率をくぐり抜け

ために、木も伐採しましょうと」URの提案を聞いて、自治会は困惑したと芳賀さんは語る。「建物を新築したり、木を切ったりなんて、まさかそんなことができるとは思いませんでした」こうしたカフェの運営は、外部団体に委託することが多い。だがURの団地マネジャー・徳中聡子は、カフェの運営も自治会がやってみたらどうかと勧めた。

緑に覆われたオープンカフェがある滝山団地



自治会が自ら運営するカフェ 東京・滝山団地 (1968年◆昭和43年)

新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata



変わる日本の「暮らし」と「まち」

17

て当选しても、それがネックとなつて入居をキャンセルする人もいたという。激増する子どもに見合う幼稚園や保育園もなかった。

◆衰えを見せない自治会の活力

「住民には、住環境を良くしたいという切実な思いがありました」

滝山団地自治会の事務局長を務める志賀琴雄さんは言う。その役割を担ったのが自治会だった。

「みんな若かったし、バスの増便、終バス時刻の繰り下げ、幼稚園開設の働きかけなど、住環境改善のために走り回りました。細かい経緯は忘れましたが、病院ができるまでの間、団地の一室に医師が常駐する診療所もできたんですよ」

積極的な住環境の改善に取り組んだ結果、自治会の結束、団地住民のコミュニティ強化という副産物が生まれた。象徴的なのが、今もなお続く地元商店街と共催する夏祭りだ。団地内のバス通りを通行止めにするほど賑わい、自治会が用意する6千本の焼き鳥は瞬く

間に完売する。しかし――。

「ちょうど平成に入ったころから、子どもが巣立っていくにつれて、若い人が急に少なくなりました」

自治会福利厚生部長の芳賀静子さんはそう語る。滝山の高齢化率は、URが管理する団地のなかでも上位に入る。原因は、住民の高齢化と若い世代の転出だ。新たに引越してくる入居者も、高齢者が多数を占める。自治会は高齢化対策に向き合い始めた。そんななか、URが自治会に提案を持ちかけた。

「見守り活動を中心にしたカフェをやりませんか」

団地内のカフェを利用してもらうことで、家にこもりがちな高齢者に外に出て来てもらう。カフェでの会話が高齢者の情報収集につながり、見守りのデータにもなる。

「URの別の団地でも、集会所や空き店舗を改修した喫茶スペースがあります。でも、URが自治会に提案したのは、カフェを新築する案でした。その敷地を確保する

「高齢化が進んでいても、滝山は元気を失っていません。それは自治会の活力がそのまま続いているからだと思うんですね」

高齢者しかいないなら、高齢者同士が力を合わせて見守る。自治会の力を目の当たりにしてきた徳中は、その力があると確信した。

「自分たちの手で環境を整えてきた皆さんであれば、ご自分たちの手でカフェを運営していくこともできるだろうと思っただけです」

◆高齢者が高齢者に安心を提供

当初は困惑した自治会も、建設が決まると持ち前の積極性で準備に奔走した。テーブル、椅子などの什器から、カップなどの備品を求めて、店から店を駆け回った。

「ボランティアスタッフの募集に40人も応募があって、接客の実施訓練からコーヒーマシンの講習まで、すべて自分たちでやりました」

昨年4月、「ダイニングカフェ滝山」がオープン。誰もが立ち寄

れるつながりの拠点「滝山あんしんつながりの家」の中でスタートした。建物の2面がガラス張りのカフェは、開放感があつて気軽に入れる。日よけのパラソルが立つオープンデッキは、とても団地内のカフェとは思えない。「来店した外国人の女性が、軽井沢みたいって言っていました」

芳賀さんは、カフェの開店後新たな広がりがあったと話す。「カフェで出すケーキや豆寒天を作ってくれる女性、テラス席のパラソルを準備する男性、買い物に協力してくださる方など、それが生きがいと言ってくれています」

自治会消費生活部長でカフェの責任者の田原悟子さんも、同じ思いを口にした。「最初はできるかどうか不安でした。でも、やっていくうちに楽しくなってくるんですね。カフェに来たお客さんが喜んでくれる顔を見ると、休まないでやらないといけないという気になります。やりがい、生きがいなんです」

「100円コーヒード待っているわ、なんて会話も聞こえてくるけど、安心、見守りという目的は果たしていると思います」

滝山の高齢化対策は、家にこもりがちな高齢者に外に出て来てもらうこと、孤独にさせないことを柱とする。芳賀さんはカフェがその拠点になっていると言っている。「100円コーヒード待っているわ、なんて会話も聞こえてくるけど、安心、見守りという目的は果たしていると思います」自治会は「孫の手クラブ」という見守り活動も手がける。買い物支援や古新聞の回収などを手伝う活動である。カフェが縦糸、孫の手クラブが横糸となることで、高齢者に安心とつながりを提供している。若き日に自らの手で住環境を整えてきた自治会は、今、再び自分たちの手で高齢者が安心して生活できる住環境を整えようと奮闘し、走り回る。高齢者が住みやすい環境、それはすべての世代が住みやすいということになる。

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社